

# 随想



## 立って半畳

### 寝てX畳

富田 慎治

「近ごろむごう世の中騒がしかな」  
 「ほんなこて、大したわけもなから、切った張った、ワッショイワッショイ、ハンタイ、フンサイなんて言うて。何か静かにさする妙葉のなかもんかいナ」  
 「おども前から考えとったつパッテン、そぎゃんむつかしゅう考えんちゃよか、畳ば広うするだけでくって思うナ」  
 「ン？ 畳ば広うするだけで？ 風が吹けば桶屋がもうかるごたる話ナ」

OLのA子さん。もう半年余り、毎週土曜日のお勤め帰りに近くのマンションにある茶の湯教室でお茶をけいこしていただきます。ようやく面白くなりかけたところです。そこへ、ある土曜日、のんびきならぬ急用が来ました。でも折角のおけいこを休みたくなないので、違う曜日をお願いして先生の自宅のけいこ場に行つたというわけです。

「ワー、のびのびしていい気持ち。今度から少し速いけどこちらに伺つていいですか」  
 団地サイズの狭いマンションのけいこ場に比べて、木間造りの先生の家のけいこ場のゆつたりした気分がAさんは何より気に入つたのです。それは当然でしょう。団地サイズ(畳の短辺が八〇センチそこそこ)の八畳間は木間(短辺が九五・五センチ)にすれば六畳とちよつとしかありませんから、だれしも木間造りの方が気持ちがいいに決まっています。

戦後、雨露さえしのげればと、大量に造られた公営住宅や公団住宅で、メートル法の使用とともに「狭くても一畳は一畳」という妙な論理がまかり通つて団地サイズが登場し、今やそれが畳の大ききの主流にさえなっています。これがどれほど日本人の住感覚をゆがめ、住生活を圧迫し、どれほど多くのイライラ人間をつくつたことでしょうか。

Aさんは大人ですから、先生の家がいいと意思表示もしましたが、幼い子供ならそれも出来ません。団地サイズの家に生まれ育つ子供と、広い狭いが良い悪いも気づかぬままに育つ前者はイライラセカセカ型の大人になるでしょうし、後者は少なくとも前者よりはノンビリ型に育つでしょう。そして何らかの事件にぶつかつて前者が感情を爆発させるころ、後者はまだノンビリ構えていることでしょうか。

「立って半畳、寝て一畳」とかつては言われました。畳の大きさは日本人の体格を基に五尺四寸(一六三・六センチ)の標準身長に対してゆとりある六尺三寸(一九〇・九センチ)にしたものです。今や高校生の平均身長は一七〇センチ強です。それに対して団地サイズの畳の長さは一六〇センチ余りしかありません。足がはみ出してしまいます。おかしいとは思われませんか。心身ともにゆとりある人間を育てるには、まず畳を広くして住感覚を正常に戻すことが第一だと思ふのです。

「わかつたや。建設大臣が畳を広うせて言うだけで世の中の騒ぎの半分はなくなつて思うがナ」  
 「フーン」

「日本人はカニより劣るバイ。カニは甲羅に合わせて穴掘るパッテン、人間は

わが体は大きくなりよつとに、家は小さう造りよるけんナ。アハハハ」  
 (熊本日日新聞社・事業局長)

## 友達

由宇 とし子

美貌と才媛のほまれ高いAさんは私の友達である。

彼女と初めて会つたのは、今の熊本放送、当時ラジオ熊本といったが、その第一回アナウンサー募集の最終審査の日であつた。

七、八名残つた候補者の中で、群を抜く美貌と歯切れのよい東京弁はもう決りと云いたいようなもので、私は眩しく彼女を眺めていた。

いよいよ面接となり、並んで腰を下した途端、彼女の脚は審査員の面前に於て見事にはね上つたのである。あとで聞いたところによれば、ソファアのクッションが極めて良好だったから、ということらしい。

とにかくその日から、彼女のあわて者ぶりをいやというほど見る破目になつた。揃つて入社を許されたからである。

爾来二十数年、ぼんやり者の私との珍道中はまだ続いているが、そのひとつふたつをご紹介します。

ある日、Aさんは上役のお宅にお邪魔した。そこで出された茶器を気に入りたのである。彼女はまず茶器を褒め、茶器を選んだ奥さんのセンスを褒めたたえた。にやにやしながら聞いていた奥さんはおっしゃった。

「それは貴女から頂いたものなのよ」  
 何のことはない。自分で贈つたものを忘れていたのである。

又ある時、ラーメン屋でラーメンを食べていた。もちろんおしゃべりに花が咲く。折しも店の電話が鳴った。彼女はアツと云う間に受話機を取り上げ自分の名前を告げたのである。

まさに営業妨害。以来彼女は電話の近くには座らない。

最近八代亜紀の「舟唄」をいたくお気に召して練習に励んでおられる。しかし「女は無口の方がよい」迄来るとどうも気になるのである。一口云わずには居られない。「私じゃ駄目だわ」親しい人は口に出して、そうでない人はひそかに思う。「よく知つてござる。」

彼女の才能や感覚の鋭さ、物事に対する熱意や努力はこの次に述べよう。

賢い人は沢山いる。しかし楽しい人はそうザラに居るものではない。楽しいだけで私は充分である。親友などと胡散く

さい呼び名で縛り、裏切りさえ許さぬ窮屈な関係なんて真平である。

汚職がらみの元総理と黒幕氏の間で「刎頭の友」なる言葉が出て失笑を買つたが、そもそも、そのような言葉で表現される人間関係等御免蒙りたい。

友達関係は淡彩の方がよい。風のように自由な方がよい。そして自分の出来る範囲で助け合い、やさしくし合えればよいと思つている。

私はとうに放送界から足を洗つたが彼女は相変わらず取材にかけ廻っている。一日にひとつ位愉快な事をしでかしているに違いない。(主婦)

## 人々

福田 真澄

人には人それぞれの生き方がある。私は、水俣病の施設「明水園」に勤めていて、特に老と、病いを相手にした人たちの、さまざまな生き方に接して、教えられることが多い。

水俣病といえは直ぐに、闘病などと大層なことを連想されるが、明水園にお

けるそれは、闘病といえるほど威勢のいいものではない。

至極おだやかな…といえはまた、語弊もあるが、毎日の過し方にさして「力み」を感じないことは確かである。

明水園では昨年、作業訓練用の部屋を増築した。訓練室などといえば、固くしく思えるが、とにかく園内のお年寄りたちが時間つぶしに、自分たちの好きなものを作つたり、ゲームを楽しむ部屋である。

何しろ、水俣病の症状のほかに肝臓も、腎臓も、心臓もと、いろいろな内臓疾患を訴えるお年寄りたちである。

きちんと、カリキュラムを編成して、訓練室に狩り出すなどの強要は好ましくない。面白そうね…と、誘いに乗つたものが、何かをやり始めればよい。

主に農・漁家の出身だから、わら細工はお得意だった。わらざうり、わらじ、わら人形など。

先日、A新聞水俣駐在記者の家で、長男が初誕生を迎えた。水俣の習慣に従つて、わらじを履かせ、餅を背負わせて歩かせる、ということと、ミニわらじを探したが、見つからない。ふと日ごろ出入りする明水園を思いつき、お年寄りに相談して可愛らしいわらじを譲ってもらつた。

無事お祝いが済んで、お年寄りには蒸

し立てのホカホカの赤飯と紅白の祝い餅が贈られて来た。

作業室で人気のあるのは築焼である。粘土をこねて、思い思いの形を作り上げるのは誰にでも興味深い作業である。酒に目の無いお年寄りが、ぐい呑みを作つた。灰皿、湯呑み掌の押し型もある。

こんな風に書くと、完全な「陶器」ができていくようであるが、実際はそうでもない。灰皿のようなもの、湯呑のようなものといった方が正しいかも知れない。しかし、作品のおさまも、一つの趣(おもむき)と、取れなくもない。

○麻痺の手の非力そのまま型となし老がいびつな灰皿も佳し  
 ○唐突に逝きし頑固が手びねりの猪口掌に受けて走る悲しさ  
 作業室に陳列した作品を手にとると、こうした感慨も湧く。

作業室まで出向けないお年寄りも多い。ベッドで細る視力を頼りに、仮名付きの経本を誦している人もある。静かな物腰に頭のさがる思いである。

○訪なへば老が閉じたる経本の軽き風さえ菓句はす

○眼のうすき老が手さぐる仮名付きの経本の位置近づけやりぬ

(水俣市立明水園囑託)